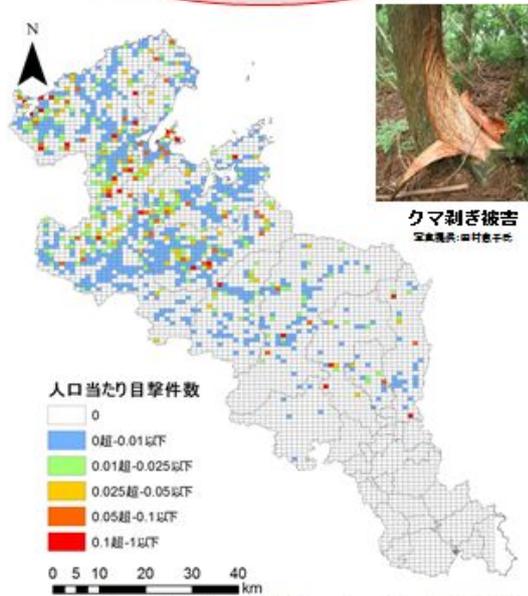


平成25年度 京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 成果

分類 番号	A38	取組 名称	ツキノワグマの出没地域予測・注意情報発信システムの開発
研究代表者： 生命環境科学研究科 教授 ・ 氏名： 田中和博			
研究担当者： 京都府立大学（田中和博、長島啓子、美濃羽靖、牛田一成） 外部分担者・協力者（和仁 睦 氏ほか）			
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名） 京都府農林水産部森林保全課			
<b>【研究活動の要約】</b>			
<p>京都府内のツキノワグマは府レッドデータブックで絶滅寸前種に区分されるなど、地域個体群の絶滅が危惧され適正な保護対策が必要である。一方、クマが里や市街地などに出没した際には、人身被害の危険性など地域住民の不安も大きい。京都府では、平成19年以来、過去7年間にわたってツキノワグマの目撃情報が収集・蓄積されている。</p> <p>本研究では、GIS（地理情報システム）を用いて、京都市以北の地域のツキノワグマ目撃情報を、3次メッシュ（1kmメッシュ）単位で解析し、土地利用状況や人口密度との関連性について調べた。</p>			
<b>【研究活動の成果】</b>			
<p>1) ツキノワグマ目撃情報の解析</p> <p>京都府全域を対象に、過去7年間のツキノワグマ目撃情報を年別、月別、地域別に解析したとともに、3次メッシュ（1kmメッシュ）単位で人口密度との関係も解析した。</p> <p>ツキノワグマの目撃は京都市以北で観測され、丹後や中丹では、生活空間のほぼ全域に渡っており、一人当たり年に0.01回以上目撃している区域は、与謝野町内や由良川沿いに多く分布していた。</p> <p>ツキノワグマの出没は、これまで偶数年に多く、奇数年に少なくなる傾向が見受けられたが、2012年からこの傾向は崩れてきており、2013年の目撃数は2012年や2008年よりも多かった。</p> <p>2) 土地利用状況を加味した解析</p> <p>森林地域では人口密度が高いところほど目撃件数が多くなる傾向があった。田+集落地域で人口密度が比較的低い区域では、森林面積が少ないところほど目撃件数が少なくなる傾向があり、このことは森林がクマの通り道になっていることを示唆していた。森林地域では大量出没した2010年には3月から出没が始まっていたが、出没が少ない年は、5月ないし6月から出没が始まっていた。</p> <p>森林+田地域では、6月までの累積出没件数が多い年は大量出没になる傾向があった。</p> <p>田+集落地域においては、概ね6月または7月から出没が始まるものの、出没開始がそれよりも遅い年は、出没が少ない年であった。</p> <p>住宅地付近では、住宅地のすぐ裏が山の場合に多く出没する傾向が認められた。</p>			
<b>【研究成果の還元】</b>			
リーフレット「京都府ツキノワグマの目撃情報」（平成25年度版） 希望者への配付/閲覧可			
<b>【お問い合わせ先】</b> 生命環境科学研究科 森林計画学研究室 教授 ・ 田中和博 Tel: 075-703-5629 E-mail: tanakazu@kpu.ac.jp			

—京都府ツキノフグマの目撃情報—

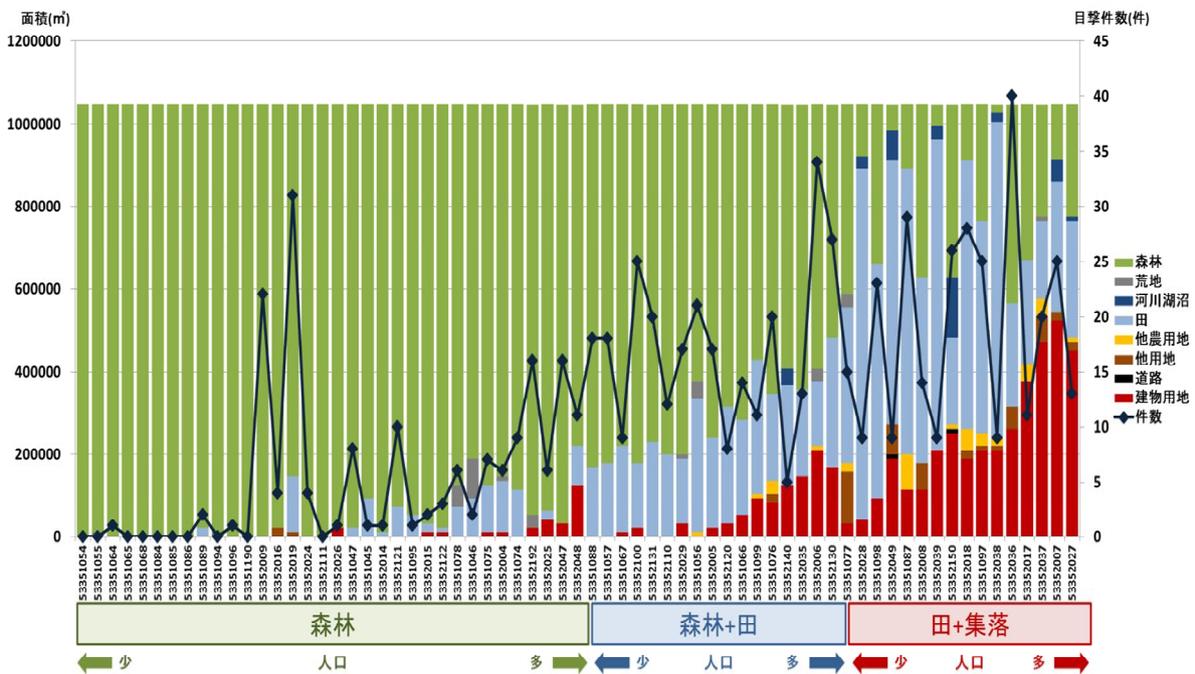
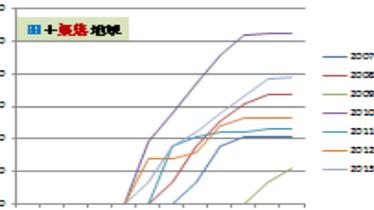
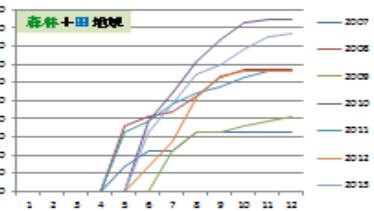
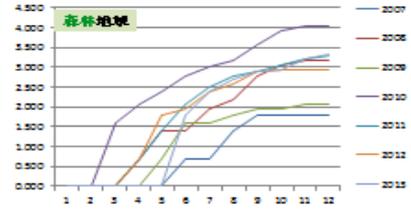
出没注意！！



2007年から2013年における年平均の人口当たり目撃件数

三次メッシュ(1kmメッシュ)当たりの過去7年間の目撃件数を7で割って年当たりの平均目撃件数を求め、それをさらに1kmメッシュ当たりの人口密度で割ったもの

与謝野町における累積目撃件数の自然対数



目撃件数と土地利用および人口密度との関係  
(与謝野町内の三次メッシュについて)